

養護教諭養成課程「生徒指導論」における アクティブラーニングの試み

森 慶輔¹⁾ 黒岩 初美²⁾

¹⁾足利工業大学教職課程センター ²⁾桐生大学医療保健学部

要旨

【目的】 筆者が担当した養護教諭養成課程の「生徒指導論」の講義にアクティブラーニングの手法を導入した講義事例を通じて、アクティブラーニングの効果、課題について検討することであった。

【方法】 講義は学生同士のディスカッションと学生によるプレゼンテーションを中心に構成され、12名の学生が受講した。ディスカッションは校則に関する内容、プレゼンテーションは不登校といじめに関する内容で実施した。筆記試験の内容、授業アンケートの内容を分析対象とした。

【結果】 教員による一方的な講義よりもアクティブラーニングを取り入れた授業のほうが、学生が主体的に学び、考えている一方で、学生が授業時間外での準備に過重な負担を感じていることも明らかとなった。

【結論】 アクティブラーニングは学生の能動的学修を促す効果が高いと考えられた。しかし、学生の過重な負担を軽減するかが課題である。

キーワード：教員養成，養護教諭，生徒指導，アクティブラーニング

I. はじめに

近年、高等教育の授業改善において、学生の主体的な学びを引き出す学習形態である「アクティブラーニング」の必要性が指摘され、アクティブラーニングのための様々な手法・形態が提案されている¹⁾。アクティブラーニングとは「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」のことであり²⁾、「一方的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習である。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外

化を伴う」ものである³⁾。これは、学生の「受動的な受講」から「能動的な学修」への転換を促すものであり、従来の「何を学ぶか」だけでなく、「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」も考えた講義の展開が大学教育に求められていると言える。こうした流れを受けて、教員養成においても新たな課題(英語、道徳、ICT、特別支援教育等)やアクティブラーニングの視点からの授業改善等に対応した教員養成への転換が求められており⁴⁾、教職課程を履修する学生はアクティブラーニングを経験しておく必要がある⁵⁾。

2016年現在、養護教諭養成のカリキュラムは教職に関する科目と養護に関する科目で構成されている。本稿で取り上げる「生徒指導論」は教職に関する科目に位置づけられている。1986年の教育職員免許法の改正により創設され、その趣旨は「児童の人格健全な発達を図るため、教科、道徳及び特別活動の教育課程内並びに教育課程の外にわたり、学校の教育活動全体を通じて行われ」、「青少年非行等対策という消極的な面にだけあるのではなく、積極的に学校教育の全領域において、すべての生徒のそれぞれの人格により良き発達を目指すとともに、学校生活が生徒一人一人にとっても、有意義に、かつ興味深く充実したものになるようにする」ためである。現在では、「学校では多くの教員がいじめ、登校拒否、薬物乱用など児童・生徒の生命・健康にもかかわる問題に直面し、様々な努力にもかかわらずそれらへの決定的な対処方法が見出せないまま日々苦慮している現実を踏まえ、生徒指導上の問題等に現職教員がより適切に取り組む」ことができるようにすることが求められている⁶⁾。この趣旨を踏まえると、養護教諭を養成するにあたり、生徒指導を真の意味で学習するには、学生自らが学校現場の現状を知り、どのような対応策がとられているのかを把握し、自分が養護教諭になったときにどのような対応策をとるべきか、とれるのかを考える、という生徒指導の根拠を探索する能動的学習法が適していると考えられる。しかし、アクティブラーニングは評価が定まっている学習方法とは言い切れず、導入する上でさまざまな課題が浮上することも予想される。

現在までのところ、アクティブラーニングを用いた教員養成の試みは報告が少なく、報告のほとんどが小中高等学校教諭養成課程での取り組みに関するものである。養護教諭養成課程の教職に関する科目での報告は、生徒指導論にロールプレイングを導入した取り組みを報告した梨木ら⁷⁾があげられる程度である。

こうしたことを背景に、本稿では、筆者が担当した養護教諭養成課程の必修科目である「生徒指導論」において、ワークシートを用いたグ

ループワーク、不登校といじめを題材としたプレゼンテーションというアクティブラーニング的手法を導入した講義の試みを紹介し、本講義において学生がどのようなことを能動的に学んだか、アクティブラーニングについてどのように考えているかを明らかにするとともに、アクティブラーニングの効果、課題について検討することを目的とした。

II. 方法

X大学看護学部で2016年度前期に開講された「生徒指導論」でアクティブラーニング的手法として学生同士のディスカッションと学生のプレゼンテーションを取り入れた。生徒指導論の単位認定者は第一著者であり、第二著者（元養護教諭）はオブザーバーの立場で講義を担当した。なお受講学生は12名であり、全員が養護教諭一種免許状の取得を目指す学生であった。

本科目は15回で構成され、オリエンテーションとまとめを含む講義（6回）、ディスカッション（1回）、プレゼンテーション（8回）で授業展開がなされた。15回の講義概要は表1に示した通りである。教室はX大学附属図書館1階のアクティブラーニングスペースを使用した。ここには電子黒板2台、大型ディスプレイ、可動式の机と椅子が常設され、常時使用できるようになっている。

受講学生には初回授業（第1回：オリエンテーション）でアクティブラーニングの説明を行い、プレゼンテーションやディスカッションを行う授業形態であることを説明した。その上でプレゼンテーションは3人1組で、不登校に関する内容、いじめに関する内容から2つのテーマを選択し、プレゼンテーション資料を事前に（授業時間外に）Microsoft Power Pointで作成し、電子黒板を用いて発表することも説明し、その割り振りも行った。

プレゼンテーションは第7回から第14回で実施した。まずプレゼンテーションを実施し、終了後に疑問点や不明点について質疑応答を行った。この際、1回以上の質問を発表者以外に義務づけた。その上で、筆者らが受講学生全

表 1 生徒指導論のシラバスと授業形態

授業概要	児童期・思春期の生徒指導を中心テーマとし、いじめや不登校、問題行動など具体的な事例に則して考察・討論し、生徒指導の意義、生徒指導の基礎を理解させる。	
授業計画	第 1 回	オリエンテーション 【講義】
	第 2 回	生徒指導の意義と課題 【講義】
	第 3 回	生徒指導体制と生徒指導計画 【講義】
	第 4 回	校則、懲戒、体罰と生徒指導 【グループワーク】
	第 5 回	児童生徒を取り巻く環境の変化と生徒指導 【講義】
	第 6 回	生徒指導と教育相談 【講義】
	第 7 回	不登校・引きこもりへの指導援助 (1) 現状と背景 【プレゼンテーション】
	第 8 回	不登校・引きこもりへの指導援助 (2) 小学校 【プレゼンテーション】
	第 9 回	不登校・引きこもりへの指導援助 (3) 中学校 【プレゼンテーション】
	第 10 回	不登校・引きこもりへの指導援助 (4) 高等学校 【プレゼンテーション】
	第 11 回	いじめへの指導援助 (1) 現状と背景 【プレゼンテーション】
	第 12 回	いじめへの指導援助 (2) いじめをどう捉えるか 【プレゼンテーション】
	第 13 回	いじめへの指導援助 (3) ネットいじめ 【プレゼンテーション】
	第 14 回	いじめへの指導援助 (4) いじめの予防 【プレゼンテーション】
	第 15 回	まとめ 【講義】
授業の目的・到達目標	人間としての在り方・生き方を問う生徒指導のすすめ方について考察し、生徒指導の実践的指導力の基礎を培うことを目標とする。	
教科書	文部科学省「生徒指導提要」教育出版、2011 年 本間友巳（編著）「学校臨床」金子書房、2012 年	
評価基準及び成績評価方法	レポートまたは試験（おおむね 50%）と講義内での発表およびディスカッションへの参加態度（おおむね 50%）により評価する予定だが、受講者の人数によっては評価方法を変更することもある。変更する場合は事前に受講生に周知する。	

員にさまざまな質問を投げかけながらフリートークを行い、最後に簡単な感想を書かせ（コメントカード）、提出させた。

ディスカッションは第 4 回の講義で実施した。「校則、懲戒、体罰と生徒指導」と題し、朝日新聞 Digital 内にある「(乃木坂よのなか科授業：1) 校則は誰のためにある？」を用い(図 1)、6 人を 1 グループとしてディスカッションを行い、校則についてさまざまな角度から考えさせた⁸⁾。

本講義の最終評価は、講義終了後に回収したコメントカードと講義内の受講態度を 50%、試験期間内に実施した期末考査を 50%として、総合的に評価した。期末考査は論述式で実施し、問題は事前に予告し、試験会場への電子機器以外の持ち込みを許可した。試験問題は「1. 校則、懲戒、体罰について、授業で学んだこと、考えたことを述べなさい。」「2. 生徒指導と教育相談の違うところ、同じところを述べなさい。」「3. 不登校への指導援助について、授業で学ん

だこと、考えたことを述べなさい。」「4. いじめへの指導援助について、授業で学んだこと、考えたことを述べなさい。」「5. 将来養護教諭として生徒指導に携わるにあたって（と仮定して）、本講義を通して考えたことを述べなさい。」「6. 本講義を受講した感想（授業内容、授業方法、その他）を述べなさい。（この設問については、否定的、批判的な内容を書いても成績に悪影響を及ぼすことはありません。）」の 6 つで構成され、1 から 5 について採点対象とし、「授業内容を踏まえているか」「自分なりの考え、意見が述べられているか」を採点基準とした。

授業アンケートは X 大学看護学部教務委員会が実施しているもの（表 2 の 1～16）にオリジナルの設問（表 2 の 17～20）を追加して実施した。授業アンケートの項目は表 2 に示した通りである。各項目について「5. はい」から「1. いいえ」までの 5 件法で回答を求めた。

今回受講した 12 名の学生の「筆記試験答案の設問 1, 3, 4, 6」及び「授業アンケート」

をふまえて指導することが良いのではないかと考えた。

学生 B :

校則に基づいて指導を行う場合は、一人一人の児童生徒に応じて適切な指導を行うとともに、児童生徒の内面的な自覚を促し、校則を自分のものとしてとらえ、自主的に守るように指導を行っていくことが重要だということを学んだ。校則と言うのはどれだけ生徒のためだとしても、その意味をないがしろにして生徒に守らせるのでは、それはもはや何の教育的意味を持たないと思った。必要な校則というのはその意味を教師と生徒がお互いに理解した上で成立するものなのだと考える。しかし、現在の校則はその教育的意味を欠いた単なる規則となってしまうと思う。今ある校則を見つめ直し、

理想的な校則を掲げると同時に、教師、生徒の両方が校則の持つ意味を考えることが必要であると授業を通して感じた。(後略)

下線部にあるように、学生 A、B とも当初自分なりの考えをもっていたようだが、ディスカッションでさまざまな意見を聴いた上で別の視点からの考えも導いていた。また現時点での具体的な対応策も学生の視点ではあるが考えられていた。つまり学生同士のディスカッションが、学生に主体的に考えることを促したと考えられ、一定の教育効果はあったと考えられた。

2. プレゼンテーションを取り入れた講義の効果、課題

プレゼンテーションは不登校に関する内容 4 テーマといじめに関する内容 4 テーマで行われた。学生が作成したプレゼンテーション資料

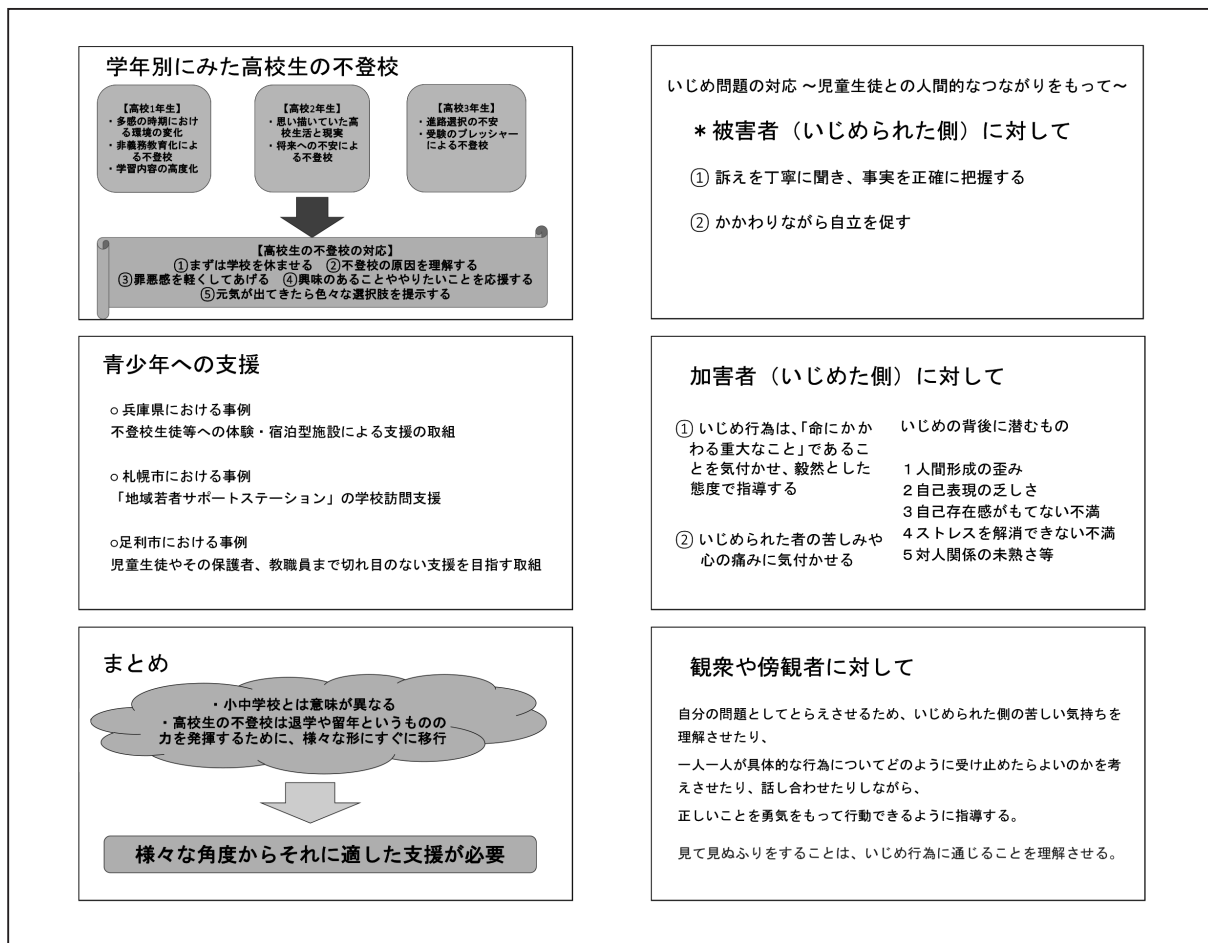


図 2 学生が作成したプレゼンテーション用の資料（一部を修正し掲載）
左：高校生の不登校，右：いじめへの対応

の一部を図2に示した。プレゼンテーション終了後にプレゼンテーションを聞いた学生に質問をすることを義務づけたためか、発表内容の確認が多かったものの、発表者の見解を問う質問などもあり、活発に質疑がなされていた。

期末考査の設問3および4の回答について代表的なものを以下に示す。

学生C:

不登校の対応にあたって基本的な考え方は、(一部省略)、迅速かつ組織的に対応することである。不登校のきっかけは、いじめが思っていたよりも少なく、人間関係によるものが多かった。不登校児をゼロにするということは、難しいと感じた。世界に目を向けてみると、不登校はそこまで問題であるようには思わなかった。不登校の支援を行っている組織を十分に活用して「学校づくり」「体験活動」の場づくりをしていくことが必要である。生徒と向き合い、距離を縮めて、何でも話せる信頼関係を築いていくことが大切であると思った。(後略)

学生D:

現在の不登校の指導援助については、登校を積極的に促すつまり強要するような事はしてはいけなく、まず不登校の子供の精神状態の安定を図り、その後指導や援助を進めていくことが、適切である。また、まず保健室登校を勧めるといこともわかった。これらは、私が小中学生だったころとは違う指導援助であると感じた。私の小学校でも不登校の子がいたが先生が積極的に家庭訪問をし、クラス全体でその子に手紙を書いたこともあった。いま考えるとその子にとっては登校を強要されていると感じ、逆に来づらくしてしまっていたのではないかと考えた。私が養護教諭になったときには、このような、本人の気持ちを考えない一方通行な指導援助が行われないよう、担任との連携や講義で学んだことを活かして指導援助を行いたいと考えた。

学生E:

(前略)、現代のいじめの定義とは、「いじめ」か否かの判断は、表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行うものとするということであり、いじめられた側

の気持ち1つで、いじめが遊び等に変化してしまう。そんな中で、どのようなものがいじめなのか当事者ではない養護教諭がそれを判断するのは難しい。そのため日頃から児童生徒の行動や関係性を把握している必要があるのではないかと感じた。そのために、積極的に保健室から出て生徒たちにあいざつをしていきたいと考えた。挨拶だけでも、いつも行う関係性を児童生徒たちとつくり、例えば今日は挨拶を返してくれるときあまり元気がなかったとか、そういう点から声をかけるきっかけを見つけていくことができたらと思う。そうすることで、できるだけ早く児童生徒の間で起こっていることに気づき、養護教諭としてどんな支援ができるか考え実行していきたいと考えた。

下線部にあるように、学生C、D、Eともプレゼンテーションの内容を受けて、自分の小中高校生のころと照らし合わせたり、養護教諭になったときにどのようなことができるかを考えたりしていた。学生主体のプレゼンテーションとその後の質疑、筆者も交えたフリートーキングにより、さまざまなことを頭に思い巡らせ、養護教諭としてどのように対応できるかを全員が考えたようであった。こうしたことから、こちらも一定の教育効果はあったと考えられた。

3. アクティブラーニングを取り入れた講義の効果、課題

授業アンケートの結果と期末考査の設問6の回答から、アクティブラーニングを取り入れた講義の効果、課題について改めて検討する。

授業アンケートの項目及び結果は表2に示した通りであるが、総じて高評価であったといえる。今回取り入れたディスカッションやプレゼンテーションに関する評価(項目17～20)は5点満点で4.7～5.0と非常に高い評価を得ており、全体としての満足度も4.6と非常に高い評価であった。これらの評価には12名という少人数授業であったことも影響していると思われるが、学生が主体的に学ぶ、講義に積極的に参加するということが高い満足度に繋がったと言えるのではないだろうか。

また、期末考査の設問6「本講義を受講した

表2 授業アンケートの結果 (N=12)

設 問	平均値	標準偏差
1. あなたの学力からみて理解できる授業ですか。	4.6	0.5
2. 興味や関心が深まっていますか。	4.8	0.4
3. シラバスに沿った内容ですか。	4.8	0.4
4. 学生の私語などなく静かですか。	4.2	0.9
5. 教員の話は聞き取りやすいですか。	4.7	0.5
6. テキストや教材は理解に役に立っていますか。	4.6	1.2
7. 教員の熱意は伝わってきますか。	4.6	0.9
8. 黒板（パワーポイント等）の書き方や文字は見やすいですか。	4.8	0.6
9. 教員は学生の参加（質問、発言）を促していますか。	5.0	0.0
10. あなたはこの授業にどの程度出席していますか。	4.5	0.9
11. あなたはこの授業のノートをとっていますか。	4.8	0.6
12. あなたは時間外にこの授業の学習をしていますか。	4.4	1.2
13. あなたはこの授業の宿題（課題）をやっていますか。	4.9	0.3
14. あなたはシラバスを活用していますか、あるいはしましたか。	3.9	1.2
15. 全体として、この授業に満足していますか。	4.6	0.7
16. この授業に関連してオフィスアワーや学習相室を利用していますか。	2.3	1.7
17. 自分たちで課題を調べることで勉強になりましたか。（何か学ぶことができましたか。）	5.0	0.0
18. 他のグループの発表を聞いて勉強になりましたか。（何か学ぶことができましたか。）	4.9	0.3
19. 自分たちで資料を作成し、発表することは有意義でしたか。（ためになりましたか。）	4.9	0.3
20. 教員が一斉授業形式で講義するよりも自分たちで課題を調べ、発表するほうが有意義でしたか。（ためになりましたか。）	4.7	1.6

感想（授業内容、授業方法、その他）を述べなさい。」の回答について代表的なものを以下に示す。

学生 F:

毎回、その時の講義の内容にそって学生同士で意見を交換しあい、自分1人ではなくみんなの意見をきけてとても有意義な講義であったと思う。また、自分たちで、パワーポイントを作り発表することにより内容が頭に入りやすかったし、それぞれの発表をしつかりきこうという姿勢にもつながった。自分たちで講義をつくりあげていっている感覚があり、毎回楽しみであった。（後略）

学生 G:

（前略）、自分は不登校になったこともないし、ひどいじめにあったこともないので、養護教諭になってからそんな子たちの相談に乗ったり、話を聞いたりできるのか不安だった。不必

要なアドバイスをしてしまう気がしていた。今回授業を通し学んだことを生かしていけるようにしたい。

学生 H:

（前略）、調べたことを自分たちでまとめて他人に伝えることは、自分にとっても他人にとっても大きな力となり、深く学ぶことができた。自分たちの発表から先生方が発展させてくれたことで学びが広がった。自分たちならどうするかなど、問われることで、考えが膨らみ、学んだことを発表するだけにとどまらず、発想を広めることができた。（一部省略）、質問することで、具体的な対応策や複数の人の意見を聞くことで理解を深められた。臨床経験のある先生（著者注：第二著者のことを指している）の意見やお話を聞くことにより、養護教諭の実際を知ることができて、実践的な対応策がわかりやすかった。

学生 I:

(前略) 授業や他のグループの発表を聞いてい
るときは受け身の状態であった。自分たちのグ
ループの発表の際には、手分けして情報を集め
て共有し、まとめたので理解が深まったと感じ
る。ただ、他の科目の課題やテスト、提出書類
などがあり忙しく、きちんとした発表ができな
かった。インターネットからそのまま引用した
り、不確かな情報だったり、グラフや数値がわ
かりにくくなってしまった。(後略)

学生 J:

人前で発表することがなかったのでどちらかとい
えば苦手だが、この講義で発表する機会があっ
たのでとても良い練習になった。発表で自分か
ら情報を伝えることはとても大切なことだと
思う。学生自らが主体となって学ぶことにより積
極的に授業に参加でき、興味関心が深まった。

学生 K:

(前略) 発表においては、他の講義等ではパワー
ポイントで発表することがあまりないためその
点においても学ぶことがあった。自分達で調べ
ることにより、さらに知識が身につく、他のグ
ループの発表、先生のコメントなどを聞くこと
により、ただの発表では終わらず、今後の課題
も見つかるため、とても勉強になった。今回の
講義で学んだことを忘れず、教員採用試験・養
護教諭になったら生かしていけるようにしてい
きたい。またこの講義で知識がかなり不足して
いるということも感じたので、少しずつでも勉
強を進めていくようにしていきたいと思う。

以上にあるように自分たちが主体的に講義に
参加することで、深い学びが達成できたとの意
見が多かった。また知識不足を感じ、自分で学
習する必要性も認識したようである。また学生
G の回答にもあるように、不登校といじめは
生徒指導上の大きな問題であるものの、今回の
受講学生は不登校の経験もいじめ、いじめられ
の経験もほとんどなく、どう対応してよいか不
安に感じていたようだが、第二著者のコメント
等を参考に一定のイメージを持つことができた
ようである。これは現職の養護教諭のコメント
が有効であることを示した梨木ら⁷⁾と同様の

結果であると言える。こうしたことから、今回
のアクティブラーニングの手法を取り入れる試
み、養護教諭経験者を講師に含める試みはおお
むね効果があったと考えた。

しかし、学生 I の回答にあるように、看護学
部での養護教諭養成のため、他の授業との兼ね
合いもあり、学生には相当な負担だったと思わ
れる。よってアクティブラーニング的手法の教
育効果を維持しつつ、学生の授業時間外の負担
を軽減する方法を模索する必要があるだろう。
また一定の講義水準を保つためにはプレゼン
テーション資料を作成する際の手助け、プレゼ
ンテーションやディスカッション時の教員の的
確なコメントなど、教員側の努力が欠かせない
ことを痛感した。一方的な講義であれば事前の
授業準備を入念に行うだけでよいが、アクティ
ブラーニングの場合は事前準備だけでなく、授
業時の学生間の反応を見ながら臨機応変に対応
することが求められる。教員の質的向上の努力
も課題であるといえる。

IV. 結論

今回生徒指導論においてディスカッションや
学生主体のプレゼンテーションといったアク
ティブラーニングの手法を用いた授業展開を行
い、期末考査の回答内容や授業アンケートの結
果から、教員の一方的な講義よりもアクティ
ブラーニングの手法を用いた講義のほうが、学生
の能動的学修の観点から高い効果が期待でき
ることが示された。しかし学生が授業時間外での
準備に過重な負担を感じるという課題があるこ
とも明らかとなった。

付記

2016 年度前期に開講した「生徒指導論」を
熱心に受講し、主体的に学ぼうと努力した 12
名の学生に深謝申し上げます。

文献

- 1) 中央教育審議会．新たな未来を築くため
の大学教育の質的転換に向けて～生涯学
び続け、主体的に考える力を育成する大

- 学へ～(答申). 2012. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (2016年10月31日参照)
- 2) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会. 教育課程企画特別部会における論点整理について(報告). 2015. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf (2016年10月31日参照)
 - 3) 溝上慎一. アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換: 東信堂; 2014.
 - 4) 中央教育審議会. これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申). 2015. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf (2016年10月31日参照)
 - 5) 河野麻沙美. 教員養成課程におけるアクティブラーニングの課題と展望: 21世紀型の学びを創出する教師の育成に向けて. 上越教育大学研究紀要. 2016; 35: 43-55.
 - 6) 文部科学省. 教職課程認定申請の手引き(平成29年度開設用). 2016. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/12/02/1267643_1.pdf (2016年10月31日参照)
 - 7) 梨木昭平・幡中理恵. 養護教諭養成課程におけるロールプレイングについての一考察—「生徒指導論」を中心に—. 日本養護教諭教育学会誌. 2013; 16(2): 51-56.
 - 8) 朝日新聞Digital. (乃木坂よのなか科授業:1) 校則は誰のためにある?. 2013. http://manabu.asahi.com/news/pdf/seiji_01.pdf (2016年10月31日参照)

Attempt of active learning for "Student guidance" in course of Yogo teacher training

Keisuke Mori ¹⁾, Hatsumi Kuroiwa ²⁾

¹⁾ Center of Teacher Training, Ashikaga Institute of Technology

²⁾ Department of Health Sciences, Kiryu University

Abstract

[Purpose] The purpose of this paper was to examine active learning through the example of lessons that introduced active learning methods.

[Methods] The study took place in the "student guidance" class, of which the author was in charge, within the Yogo teacher training course. Lecture was composed mainly of student's discussion and presentation by students, and 12 students took a lecture. Discussion was conducted on the contents of school regulations, presentation was carried out with regard to school refusal and bullying. The contents of the written examination and contents of the class questionnaire were analyzed.

[Results] Analysis revealed that rather than a one-way lecture by the teacher, a lesson that incorporates active learning allows for subjective learning and thinking by the students, and active learning is thought to be highly effective for stimulating students' active study. However, it was also clear that there is a problem with students feeling overloaded by the burden of preparation outside of class time.

[Conclusion] Active learning was thought to be highly effective for stimulating students' active learning. However, it is a future task to reduce the burden on students.

Key words: teacher training, yogo teacher, student guidance, active learning